様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３６１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２２２４

研究課題名（和文）近代日本の科学的人種主義を基盤とする民衆統治秩序の展開：部落問題の転回と再文脈化

研究課題名（英文）Development of governing order for the people based on scientific racism in modern Japan : Turn and re-contextualization in Buraku Issues

研究代表者
関口　寛（SEKIGUCHI, HIROSHI）

四国大学・経営情報学部・准教授

研究者番号：２０３２３９０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、20世紀前半期に欧米で広範囲に強い影響力を振るった科学的人種主義が、日本にも深い影を及ぼしていたことについて、国内の部落問題を事例に明らかにした。具体的には、部落史研究の先駆者として知られる喜田貞吉の理解や、当該期に内務省が開始した感化救済事業などの社会改良政策が、人種の優劣にかんする理解に基礎づけられていたこと、そこに人類学、犯罪学、精神医学などの影響があったことを指摘した。またかかる統治の眼差しに対し、当事者たちが新天地を求めて国内外に移住した事例や、科学的人種主義に対抗する形で展開した思想や実践から、当該期のマイノリティ集団の生存戦略や文化創造についても考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
19世紀末から20世紀前半にかけて、欧米では科学的人種主義が広く社会に受容され、マイノリティ集団に対する排除や抑圧が強化されたことが指摘されてきたが、日本においても同様の歴史的変容が起こったのか否かについては、これまで究明されてこなかった。本研究では、部落問題を例として同様の変化が日本国内でも生じていたことを明らかにした。また今後、日本社会における統治のしくみを分析する上で、これをグローバル・ヒストリーのなかに位置付けて考察することの重要性を確認した。

研究成果の概要（英文）：This study clarified that scientific racism, which had a widespread and strong influence in Europe and the United States in the first half of the 20th century, had a profound shadow on Japan, taking up the case of Buraku issues in Japan. As specific examples, we took up the understanding of Sadakichi Kida, who is known as a pioneer of Buraku history research, and social improvement policies such as the Kankakyusai policy started by the Ministry of Interior. As a result, in these intellectual activities, we found an understanding of the superiority and inferiority of race based on the knowledge of anthropology, criminology, psychiatry,etc.In addition, we will take up the cases where the discriminated parties emigrated abroad in search of a new world, and the ideas and practices that they developed in the form of countering scientific racism, considered about the survival strategy and cultural creation of minority groups during the period.

研究分野：日本近現代史、思想史

キーワード：人種主義　喜田貞吉　鳥居龍蔵　賀川豊彦　生政治　統治性　被差別部落　在米日本人

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）　従来の部落史研究では、明治時代以後の日本における部落差別については、近代以前の封建的身分制や宗教的習俗の残滓として取り扱われ、日本社会の「後進性」「特殊性」を象徴する事象として研究が進められてきた［井上 1954 など］。これに対し、近年では近代以後、グローバルに行き渡った人種差別主義との接点や共通性が指摘されてきた［竹沢 2005］。研究代表者も、日本のアカデミズムのなかで被差別部落民を「人種」として研究した鳥居龍蔵の人類学研究をとりあげ、その影響について考察した［関口 2011］。

（2）　20 世紀初頭の西洋諸国が福祉をつうじて国民の健康を管理し、社会全体の効率や生産性を高める政策が推し進められたことを指摘し、「人種的福祉国家」として論じたマーク・マゾワーの研究が知られていた［マゾワー2015］。だが、かかる特徴の統治が日本においても確認しうるのか、検証が俟たれてきた。

（3）近代の人種主義については、M・フーコーは精神医学や生物学の知見から人間を「正常」／「異常」に分類し、教育・治療・矯正をつうじて人びとを「正常」化するとともに、後者に該当する集団（例えば病者、障害者、犯罪者、セクシャル・マイノリティなど）を排除する「生政治」「統治」論を提起した［フーコー2007］。だが近代以前から継承されてきた民族差別と、かかる新たな人種主義がいかに連結されたかについては未解明とされてきた。

２．研究の目的

上述の研究状況および動向を踏まえ、本研究では 20 世紀初頭の日本に登場した民衆統治の秩序について究明し、以下の解明を目的とした。

（1）　当該期に社会に流布した① 科学的人種主義の受容と展開、② 被差別部落を対象として実施された学術研究、③ 社会問題としての部落問題の解決を掲げた社会事業をとりあげ、これらが相互にどのように影響し合い、あらたな統治の制度や認識が形成されたか、について考察した。

（2）　上記（1）を踏まえ、当該期に形成された排除の構造や眼差しに対し、被差別部落の当事者がどのように自己をとりまく環境を変容させ、またそれを可能とする言説や実践を創造したかについて考察した。

３．研究の方法

（1）社会問題認識と社会事業にたいする科学的知見の影響

日本政府は社会問題の解決を掲げて 1908 年、感化救済事業を開始するとともに、その一環として被差別部落の改善に着手し、1912 年、はじめて部落問題を単独の主題として取り上げた細民部落改善協議会が開催された。こうした動向をつうじて部落問題に関与した内務官僚、社会事業家、宗教家、教育者、地域行政担当者らの部落問題言説に、上述の科学的知見がいかに影響を及ぼしたかを究明した。

（2）歴史学者による部落問題研究への取り組みと関心

戦前期の考古学、古代史の研究者である喜田貞吉は、初めて本格的な部落史研究に着手したことで知られ、当該研究分野の先駆者とされてきた。彼が発表した『民族と歴史』（第 2 巻第 1 号、1919 年）の「特殊部落研究号」の前後に発表した部落史研究の論考をとりあげ、「日本人種論」「日本民族形成論」と部落史研究との連関について分析した。その際、彼と同郷人で学問上の好敵手であった人類学者、鳥居龍蔵の被差別部落民研究や日本人種論の影響について配意することで、彼の学問研究が当該期のアカデミズムのなかでどのような意味や意義を有したかについて考察した。

（3）被差別部落当事者による社会運動の言説と実践

①　1922 年に被差別部落民によって創立された全国水平社は、主流社会から注がれる差別的な眼差しに対し、対抗的な言説と実践を創造し、展開していった。ここではその特徴を解明するため、全国水平社の創立を後押ししたと考えられてきた相馬御風の文学論を、当該期の外国文学や社会思想の受容状況のなかに位置付け、両者の影響関係について考察した。

② 当該期には故郷を離れ、新天地を求めて移住する被差別部落民が少なからず存在した。こうした事例として、アメリカへの移住者の足跡を調査し、また白人中心的なアメリカ社会において日本人社会が部落問題をどのように理解し、反応したかについて分析し、人種主義のグローバル・ヒストリーという観点から考察した。

４．研究成果

（1） 当該期に日本に移入された精神医学や犯罪学などをつうじて、犯罪、貧困、売買春などの社会問題が病理化されるとともに、その原因として犯罪者、非行少年、浮浪者、障害者、娼婦などマイノリティの「異常」を説明する枠組みと眼差しがもたらされた。同時に、かかる「社会的逸脱者」が多く含まれる人口集団として被差別部落への関心が高まり、その危険性が宣伝されていった。こうした取り組みをつうじて新たな民衆統治の秩序が台頭するとともに、前近代から引き継がれた差別のあり方を再編したことが明らかになった［関口 2019a］。また、こうした眼差しが当該期の社会事業家の活動をつうじて広く社会に普及していたことを指摘した［関口 2016］。

（2） 当該期に喜田貞吉が開始した部落史研究は、彼がそれ以前から取り組んできた日本人の起源にかんする研究と密接な関係があり、また人類学者、鳥居龍蔵の日本人種論にも強い影響を受けていたことが判明した。喜田の部落史研究の特徴は、部落民の起源と、歴史的な部落差別の原因にかんする研究を切り離し、後者としてケガレ観念や人口増加によって生じた生活難をあげたことなどを指摘した。ただし、彼の研究や被差別部落に対する眼差しには、生存競争が生み出す社会進化への信奉や、それに敗れた者に対するパターナリスティックな態度など、限界があったことにも論究した［関口 2018］。

（3）
① 全国水平社の創立趣意書や初期の実践に登場する「人間は尊敬するべきものだ」というスローガンが、相馬御風『ゴーリキイ』(1921 年) から引用された原因について考察した。その結果、御風のゴーリキー文学論が、犯罪者や浮浪者、障害者、娼婦などに向けられた差別的眼差しを否定し、社会的逸脱者も含めあらゆる存在を肯定する人間論を展開していたことに創立メンバーが強く感応したこと、また御風の論が当該期の社会主義者の間で広く読まれたクロポトキン『相互扶助論』を下敷きに展開されており、全国水平社も間接的にその強い影響を受けているとの仮説を提示した［関口 2019b］。

② 19 世紀末から 20 世紀初頭に福井県内の被差別部落からアメリカのカリフォルニア州に移住した人びとの事例研究から、当該期に被差別部落から新天地を求めて移住した人びとが、故郷や同郷人同士の紐帯を維持しながら、新天地での生活や経済活動に順応したことを指摘した。また同時期にアメリカ社会で巻き起こった排日運動のなかで、在米日本人のなかから日本の被差別部落民に共感を寄せ、全国水平社との連携に向けた活動が起こったこと、しかしそうした動きは 1924 年の排日移民法成立を契機として消失したことなど、従来知られてこなかった史実を明らかにした［関口 2020］。

〈引用文献〉
井上清 1954 『部落の歴史と解放運動』部落問題研究所
関口寛 2011 「20 世紀初頭におけるアカデミズムと部落問題認識」『社会科学』第 91 号、125-147 頁
関口寛 2016 「賀川豊彦の社会事業と科学的人種主義」坂野徹、竹沢泰子編『人種神話を解体する 第 2 巻 科学と社会の知』東京大学出版会、105-137 頁
関口寛 2018 「喜田貞吉の「反差別」の歴史学と社会への眼差し」世界人権問題研究センター編『問いとしての部落問題研究 近現代日本の忌避・排除・包摂 （人権問題研究叢書）』63-86 頁
関口寛 2019a 「統治テクノロジーのグローバルな展開と「人種化」の連鎖 日本近代の部落問題の成立をめぐって」『人文学報』第 114 号、73-95 頁
関口寛 2019b 「人間は尊敬すべきものだ」という思想 ： ゴーリキー『どん底』の受容と全国水平社の創立 」『初期社会主義研究』第 28 号、104-119 頁
関口寛 2020 「アメリカに渡った被差別部落民――太平洋を巡る「人種化」と「つながり」の歴史経験」田辺明生、竹沢泰子、成田龍一編『環太平洋地域の移動と人種』京都大学出版会、103-146 頁
竹沢泰子 2005 「総論 人種概念の包括的理解に向けて」『人種概念の普遍性を問う ： 西洋的パラダイムを超えて』人文書院
フーコー、ミシェル 2007 『社会は防衛しなければならない ： コレージュ・ド・フランス講義 1975-1976 年度』筑摩書房
マゾワー、マーク 2015 『暗黒の大陸 ： ヨーロッパの 20 世紀』未來社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Hiroshi Sekiguchi	４．巻 -
２．論文標題 Racialisation et biopouvoir dans le Japon moderne. Les burakumin : construction d’une discrimination	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Politika	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 関口寛	４．巻 105
２．論文標題 留岡幸助日記をめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 グローブ	６．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関口寛	４．巻 第114号
２．論文標題 統治テクノロジーのグローバルな展開と「人種化」の連鎖：日本近代の部落問題の成立をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 73-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関口寛	４．巻 第28号
２．論文標題 「人間は尊敬すべきものだ」という思想：ゴーリキー『どん底』の受容と全国水平社の創立	５．発行年 2019年
３．雑誌名 初期社会主義研究	６．最初と最後の頁 104-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関口寛	４．巻 第67巻第5号
２．論文標題 喜田貞吉と「反差別」の歴史学――起源論から系譜学へ――	５．発行年 2017年
３．雑誌名 地方史研究	６．最初と最後の頁 42-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 在米日本人社会と被差別部落民 The Japanese Community in America and Burakumin
３．学会等名 日本移民学会主催「国際ワークショップ――移民研究の国際化に向けて」（第1回）The First International Workshop:International Dialogueon Migration Studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 20世紀初頭のアカデミズムと統治の眼差し――鳥居龍蔵と喜田貞吉の被差別部落民研究から――
３．学会等名 東京大学・東洋文化研究所主催「「東京学派」ワークショップ　包摂と排除：東京（帝国）大学の近代学知」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 生政治的統治のグローバルな展開と被差別部落
３．学会等名 日仏学術交流シンポジウム「人種主義・反人種主義の越境と転換」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 日本近代の人種主義・差別・統治性
３．学会等名 「差別から見た日本宗教史再考―社寺と王権に見られる聖と賤の論理」研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 日本近代の「市民社会」と部落問題
３．学会等名 「差別から見た日本宗教史再考」研究会、 国際日本文化研究センター、2018年7月14日
４．発表年 2018年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 全国水平社創立の思想―社会運動のグローバルな拡散に着目して―
３．学会等名 第43回社会思想史学会大会、東京外国語大学、2018年10月28日
４．発表年 2018年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 社会運動における生政治・言説実践・アイデンティティ――水平運動の事例研究から――
３．学会等名 「近現代社会運動の国境を超えた相互作用に関する思想史的研究」研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 日本近代の民衆統治と科学的人種主義
３．学会等名 人文研アカデミー（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 国境を越えた被差別部落民の移動と「人種化」の連鎖
３．学会等名 「人種化のプロセスと メカニズムに関する複合的研究」研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 統治テクノロジーのグローバルな展開と人種化の連鎖――日本の部落問題の考察から――
３．学会等名 日仏研究交流シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 二〇世紀初頭の社会改良政策における生政治とマイノリティ
３．学会等名 生政治とマイノリティ研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 マイノリティ研究状況の検討
３．学会等名 生政治とマイノリティ研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 関口寛
２．発表標題 賀川豊彦の社会事業と科学的人種主義
３．学会等名 生政治とマイノリティ研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 平野克弥、鬼丸武士、関口寛、徳永悠、吉村智博、内野クリスタル、土屋和代、成田龍一、田辺明生、竹沢泰子	４．発行年 2020年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 422
３．書名 環太平洋地域の移動と人種：統治から管理へ、遭遇から連帯へ	

１．著者名 世界人研問題研究センター	４．発行年 2018年
２．出版社 世界人研問題研究センター	５．総ページ数 295
３．書名 問いとしての部落問題研究――近現代日本の忌避・排除・包摂――	

１．著者名 竹沢泰子、坂野徹、関口寛ほか	４．発行年 2016年
２．出版社 賀川豊彦の社会事業と科学的人種主義	５．総ページ数 299(うち105-137執筆)
３．書名 人種神話を解体する　２　科学と社会の知	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関